

成田トリデの攻防

—代執行終わる—

強制代執行が始まってから五日目の朝、残壕の前に近くの小中学校の先生6人が訪れた。

ミトリデの中の生徒たち。この斗争を大変心配しています。疲れているようだし、学校へ出てきて下さい。無理ならせめて怪我のないように。

「先生心配なら僕達と一緒にトリデの中に入って下さい。僕たちを見て下さい。子供達の声は泣声に変わっていく。」

「私は立場上無理なんです。行動できない立場だし、今日はそれで来たんじゃない。君達、勉強しなさい。学校へ来て。」

「先生僕たちだって勉強したいんです。でも空港ができたらうるさくて勉強できないじゃないですか。お父やお母が死ぬかも知れないのに、勉強なんかしておれないんです。」

校長は「怪我のないように」ただそれだけをくりかえしていた。教育者は子供達の同盟休校に何の手もうてなかった。

昭和41年7月4日、閣議で正式決定以来、5年におよぶ農民の長い斗いは、今、農地の強制収用という最悪の事態、強制代執行を迎えようとしている。

その間、空港建設の波紋は拡がり、子供達の教育の場にまで及び、その他問題を提起していった。国策だから、国家的事業だからと、自分達が開拓した土地を売り渡し、三里塚の地を去っていった条件賛成派の農民達。

御殿のような家を建ててと影口をたたかれる彼等。しかし、ある1人の老人は、「運輸省は農地として1.5億の土地を与えると約束した。しかし見て下さい」。老人は、くまでで土地を掘り起こした。

「これが畑ですか。これで何がつかれるというんですか」。その代替地の畑からは石しか出て来なかった。

「反対派の人達がああするのは当然ですよ」。

友納千葉県知事は、保利官房長官と会い、強制代執行について話し合った。代執行は2月22日から3週間と発表された。4,000 m 滑走路の北端にある6ヶ所の対象地では、残壕やバリケードの補強工事が忙がれていた。2月中は雨で足場が悪く執行ははかどらなかつた。3月に入ってブルドーザークレーンユンボなど機械力による収用として本格的に行なわれた。機械力の前には手がでなかつた。バリケードブルドーザーに押しつぶされていった立木は上に農民が乗っているようが、ようしゃなく切り倒されていった。農民の必死の叫びは、ハンド・マイクと機械のうなりにかき消されていった。代執行作業は、またたく間に終わった。

3月6日午後2時過ぎ第5地点の松の大木が上の小屋ごと切り倒され、そして終了宣言が成立された。農民の1人1人の顔は涙にぬれていた。くやしさに声はつまっていた。

闘いは農民に「死」を覚悟させる程激しいものであった。ここまで農民を迫いつめたものは何か。土への執着だけか。全んどの農民が「国家的事業」だからと他所へ移っていったではないか。それは、政治への不信ではないだろうか。民主主義は、少数者の利益や立場を無視しても良いということでは絶対でない。農民達の怒りは、叫びは、無視されてきたことへの怒りであり、常に農民が犠牲になってきたことへの叫びではなかつたらうか。

1人の老人は語ってくれた。「国家的事業として空港をつくるというのに、ただ用地をかくとくすれば良いということに農民のことがこの次ですね。実さい、真に空港建設で立退く人の事を考えてくれれば、こんなことにはならなかつたですよ」。